

<全体分析>

試験時間 75 分

解答形式

選択式・記述式(マークシートは使用しない)

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

大問3題, 小問57題(記号44, 記述13)で, 昨年度の同日日程(小問61題)よりやや減少した。

難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

難易度は変化なしだが, 長いリード文や史料問題を含むため, 解答時間が不足する可能性もある。

出題の特徴や昨年との変更点

アジア史, 欧米史, 混合問題が1題ずつ出題された。古代・近世・近代を中心に出题された。

書籍からの引用をリード文とする形式はなかった(昨年度は, 2大問で実施)。

その他トピックス

[I] 設問5・設問10では, 共通テストに近い形式での出題が見られた。問10は16個の組合せから正答を1つ選ぶという形式であった。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	記号空所 記号正誤 記号設問 記号整序 記述設問	古代の西アジア・ ヨーロッパの都市	古代の西アジアとヨーロッパの都市を取り上げて, 関連する内容を問う問題。3500字を超える長文のリード文に加え, 別に長文の史料を読まねばならず, 負担が大きい。設問5はリード文の1段落中に現れる建造物の建設時期を, 前後の記述から推定して時代順に並べるといふ問題であり, 問10は2つの史料から読み取れることを記した4つの文の正誤の組合せを問うもので, 注意深く検討することを要求する問題であった。	やや難
II	記号空所 記号正誤 記号設問 記述設問	近世イスラーム帝国	オスマン帝国・サファヴィー朝・ムガル帝国に関連する事項が幅広く問われている。多くは標準的なレベルであるが, 設問10のYでは「カピチュレーションが不平等条約のもとになった」が「19世紀」なのか否かを判断せねばならず, 「18世紀」と考えることもできるため, 判断に迷うだろう。	標準
III	記号空所 記号正誤 記述空所	近代ヨーロッパにおける産業の発展	ウィーン会議から第一次世界大戦までのヨーロッパにおける産業の発展とこれに関連する事項が扱われている。設問3では消去法が使えない2文組合せの正誤問題が9題あり, (C)・(F)・(I)ではそれぞれ1867年, 1890年, 1878年という年代が文中に含まれており, 正誤の判定には正確な知識が必要である。また設問1(c)の正答となる「イギリス」は, リード文中に何度も出ているため, 正答だと判断しづらい。	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で, 当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## <学習対策>

標準的な知識を身につけていれば解答できる問題が大半であるので、教科書・用語集をベースにした学習を進めるのがよいだろう。正誤問題に多くのバリエーションがあり、「正しいものを選ぶ」のか「正しいものの数を選ぶ」のかなど、指示を見落とさないようにしたい。消去法の使えないものも多く、過去問を中心にできるだけ多くの正誤問題をこなしておくようにしよう。共通テストと同じように、史料の内容を読み取る問題も出題されるので、時間配分にも注意したい。また、同志社大学が再三注意を喚起している「ア」と「マ」、「ツ」と「シ」等の書き分けにも気をつけたい。